

文學士 保坂弘司 著

漢文の綜合研究

學燈社刊行

——漢文の綜合研究——

昭和二十七年十一月十五日 初版發行
昭和三十年四月二十五日 十版發行

著者 保 坂 弘 司

發行者 保 坂 勝 二
東京都新宿区東五軒町四九

印刷者 鈴 木 竹 次 郎
東京都新宿区西五軒町三二

印刷所 旭印刷株式會社
東京都新宿区西五軒町三二

發行所 學 燈 社
東京都新宿区牛込局区内(東五軒町四九)

振替 東京 三六二五三
電話 九段(33)八七四五

定價 230圓 (地方売価 240圓)

は し が き

漢文を學習するには、いろいろな方法がある。極めて素朴な「讀書百遍義自らあらわる」というような體驗主義的學習法から、能率本位に科學的な趣向をこらした合理主義的學習法に到るまで、無數の方式と段階とがある。この書は、主として受験生である高等學校の上級生に、どうしたら入試對策としての漢文學習の實をあげ得るかを當面の問題として、私が編み出した方法によって述べたものである。

私は昭和五年から教壇に立ち、昭和七年から受験指導に携わつて、漢文を教えてきた。これらの十年間の體驗から割り出した指導方式によつて、昭和十六年に旺文社から「漢文の綜合的研究」を出した。未熟ではあったが、私としては自己の凡庸に鞭打ち、苦慮の末に生み出したものであった。この私自身の苦しんだ路は、若い諸君の考究の路に適う所があったらしく、望外に受験生諸君の支持を受けることができた。

は し が き

それからまた十年の時を経た今日、私は再びこの書を著述することになった。二十年の學習指導——まことに感慨無量である。この長い期間に、私はどれだけ圓熟した指導方式を立てることができたのであろうか。それは疑問である。しかし、この長い年月を、つねにどうしたら學生諸君の實力を高めることができるかを考えつづけ、そしてまた、そのための研究をつづけてきたことだけは、はっきり言える。

この書を出すに當たつて、私は厚かましくも、諸君が、この書によつて漢文がわかった、といつて呉れることを望んで心が熱くなるのであるが、そこまでは望めないにしても、もしこの書が、いくらかでも諸君の實力を同上げ、諸君に學習の喜びをもたらすことができたとなれば、それはこうした二十年間の私の苦慮と努力の堆積から生まれたものであると言えるであらう。

昭和二十七年十一月

保坂弘司しるす

漢文の綜合研究

目次

第一編 漢文學習の基礎……………一

第一章 漢文學習の目標……………一

第二章 漢文の語法……………三

一、漢文法と國文法……………三

二、漢文の基礎成分……………四

三、成分の省略……………六

第三章 形態上の句法……………八

一、四字句(六字句)法とその識別……………八

二、對偶法とその識別……………九

三、雙關法とその識別……………一〇

四、層累法とその識別……………一一

五、承遞法とその識別……………一二

第四章 意味上の句法……………一三

一、受身形……………一三

二、使役形……………一五

三、否定形……………一六

四、假定形……………一七

五、限定形……………一八

六、比較形……………一九

七、反語形……………二〇

第二編 入試漢文の實態と對策……………二四

一、訓讀に關する問題……………二四

二、復文に關する問題……………二六

三、空欄を完填する問題……………二八

四、解釋に關する問題……………三〇

五、要約に關する問題……………三二

六、内容探求問題……………三三

七、鑑賞問題……………三五

八、漢文常識に關する問題……………三六

九、故事・成語に關する問題……………三八

八、疑問形……………三九

九、抑揚形……………四〇

十、倒置形……………四一

第五章 助字の活用的研究……………四二

第六章 漢文の訓讀法……………四三

一、句讀法……………四三

二、顛讀法……………四四

三、返點法……………四五

四、送假名法……………四六

第三編 漢文の理解と探求

第一部 思想

第一 經學類

〔一〕 孔子過泰山側(禮記)「長崎大」	二九
〔二〕 人生而靜(〃)	二九
〔三〕 古之欲明明德(大學)	二九
〔四〕 小人閑居(〃)「*大阪大」	二九
〔五〕 所謂脩身(〃)	二九
〔六〕 道也者不可須臾離也(中庸)	二九
〔七〕 在下位不獲乎上(〃)	二九
〔八〕 誠者天之道也(〃)	二九
〔九〕 有子曰「其爲人也(論語)」「*法大」	二九
〔一〇〕 子貢問曰「貧而無詔(〃)」「福岡女大」	二九
〔一一〕 子曰「吾十有五而(〃)」	二九
〔一二〕 子曰「富與貴(〃)」「*北大」	二九
〔一三〕 顏淵季路侍(〃)「*靜岡大」	二九
〔一四〕 子曰「飯疏食(〃)」「九工大・靜岡大」	二九
〔一五〕 曾子曰「士不可(〃)」	二九
〔一六〕 子貢問政(〃)「武藏大・*文科大」	二九
〔一七〕 子貢問曰「鄉人皆(〃)」	二九
〔一八〕 長沮・桀溺耦而耕(〃)	二九
〔一九〕 孟子見梁惠王(孟子)「*國大」	二九
〔二〇〕 孟子對曰「王好戰(〃)」	二九

〔二一〕 不違農時穀不可勝食也(〃)	二九
〔二二〕 五畝之宅樹之(〃)	二九
〔二三〕 曰「不爲者與不能者(〃)」「岡山大」	二九
〔二四〕 昔者曾子謂子襄曰(〃)	二九
〔二五〕 孟子曰「人皆(〃)」「名工大」	二九
〔二六〕 民之爲道也有恆產者(〃)「*神戸大」	二九
〔二七〕 居天下之廣居(〃)「*靜岡大」	二九
〔二八〕 孟子曰「仁人心也(〃)」「*山口大」	二九
〔二九〕 孟子曰「今有無名之指(〃)」「香川大・東學藝大」	二九
〔三〇〕 孟子曰「拱把之桐梓(〃)」「*東教大」	二九
〔三一〕 孟子曰「人之所不學而(〃)」	二九
〔三二〕 孟子曰「君子有三樂(〃)」「橫濱國大」	二九

第二 子學類

〔三三〕 兵者不祥之器(老子)「東大」	二九
〔三四〕 昔者莊周夢爲胡蝶(莊子)	二九
〔三五〕 楊子之鄰人亡羊(列子)	二九
〔三六〕 鬻子曰「去名者(〃)」「一橋大」	二九
〔三七〕 君子曰「學不可以已(荀子)」「東學藝大」	二九
〔三八〕 吾嘗終日而思矣(〃)「*九大」	二九
〔三九〕 禮起於何也(〃)「橫濱國大」	二九
〔四〇〕 夫好利而欲得者(〃)	二九
〔四一〕 孔子南適楚(〃)「大阪女大」	二九
〔四二〕 曾子曰「同游而(〃)」	二九
〔四三〕 有形之類大必起於小(韓非子)	二九

- 〔四四〕 孟孫獵得麋(ク)……………二七
 昭侯有弊袴(ク)……………二九
 〔四六〕 今有樸木鑽遂(ク)〔*東教大・山梨大〕……………二八
 〔四七〕 夫禍福之轉而相生(淮南子)……………二三

第三 語錄類……………二五

- 〔四八〕 孔子曰「夫物惡有(孔子家語)……………二六
 〔四九〕 曾子敝衣而耕(ク)〔*京大・*神戸大〕……………二八
 〔五〇〕 學者須是務實(近思錄)……………二九
 〔五一〕 凡讀史不徒要(ク)……………二九
 〔五二〕 心清時少亂時常多(ク)……………二九
 〔五三〕 夫學莫先於立志(傳習錄)……………二九
 〔五四〕 弘治五年陽明先生(ク)……………二九
 〔五五〕 以我轉物者(榮根譚)……………二九
 〔五六〕 世人爲榮利纏縛(ク)……………二九

〔附〕 日本漢籍……………三〇

- 〔五七〕 顏之推曰「人生難得(慎思錄)……………三〇
 〔五八〕 人非聖人誰無過(ク)……………三〇
 〔五九〕 恭默思道是所以自得(ク)〔東教大〕……………三〇
 〔六〇〕 學貴以漸日進(ク)……………三〇
 〔六一〕 權能輕重物(言志四錄)〔*國大〕……………三〇
 〔六二〕 「寧人負我毋我負人(ク)……………三〇
 〔六三〕 余年少時於學(ク)……………三一
 〔六四〕 怠惰之冬日何其長也(ク)〔*山口大〕……………三一

第二部 歷史……………三五

- 〔六五〕 子皮欲使尹何爲邑(春秋左氏傳)〔東北大〕……………三六
 〔六六〕 昔者柳下惠吏於魯(戰國策)……………三八
 〔六七〕 蘇秦之楚三日乃(ク)〔*京大〕……………三九
 〔六八〕 有獻不死之藥於荊王(ク)……………三九
 〔六九〕 郭隗先生曰「臣聞(ク)〔名工大〕……………三九
 〔七〇〕 范雎復說昭王曰(史記)〔*東教大〕……………三九
 〔七一〕 項王軍壁垓下(ク)〔大阪市大〕……………四〇
 〔七二〕 項王乃欲東渡烏江(ク)……………四〇
 〔七三〕 屈原曰「吾聞之(ク)〔岩手大〕……………四〇
 〔七四〕 王粲博物多識(三國志)……………四〇
 〔七五〕 諸葛武侯戒子書曰(ク)……………四〇
 〔七六〕 宋人得玉獻諸(蒙求)〔鳥取大〕……………四〇
 〔七七〕 匡衡勤學無燭(ク)……………四〇
 〔七八〕 後漢高鳳家以農爲業(ク)……………四〇
 〔七九〕 孫叔敖爲兒時(ク)〔東北大・京大〕……………四〇
 〔八〇〕 凡取人之術(資治通鑑)……………四〇
 〔八一〕 上問諫議大夫(ク)……………四〇
 〔八二〕 唐太宗與群臣(ク)〔*北大〕……………四〇
 〔八三〕 堯治天下五十年(十八史略)……………四〇
 〔八四〕 陽城人陳勝(ク)〔*東女大〕……………四〇
 〔八五〕 韓生說羽(ク)〔*東外大〕……………四〇
 〔八六〕 太宗嘗問侍臣(ク)……………四〇
 〔八七〕 司馬光嘗語晁無咎(ク)〔*一橋大〕……………四〇
 〔八八〕 古之學者必有師(唐宋八大家文)……………四〇

第三部 文章……………四二

〔八九〕 世有伯樂(シ)(信州大)……………	三五
〔九〇〕 天下之患最不可爲者(シ)……………	三八
〔九一〕 蹈水火者(文章軌範)……………	三七
〔九二〕 巨本布衣躬耕(シ)……………	三七
〔九三〕 蘇子曰「客亦知(シ)橫濱國大」……………	三七
〔九四〕 歸去來兮田園將蕪(シ)……………	三七
〔九五〕 夫天地者萬物之逆旅(續文章軌範)(山口大)……………	三七
〔九六〕 浩浩乎平沙無垠(シ)……………	三八
〔九七〕 夫寒之於衣(シ)……………	三八
〔九八〕 水陸草木之花(古文眞寶)……………	三八
〔九九〕 孟子曰「獨樂樂(シ)福井大・静岡大」……………	三八
〔附〕 日本漢籍……………	三八
〔一〇〇〕 夫和歌者託其根於心地(古今和歌集眞名序)……………	三九
〔一〇一〕 服部南郭不談經濟(先哲叢談)(*慶大)……………	三九
〔一〇二〕 林逋之後不聞愛梅者(梅居記)(九州大)……………	三九
〔一〇三〕 余嘗讀昔人畫(耶馬溪圖卷記)(*埼玉大)……………	三九
〔一〇四〕 西行數百步(梅溪遊記)……………	三九
〔一〇五〕 出孟縣則黃河矣(棧雲峽雨日記)(群馬大)……………	三九
第四部 漢 詩……………	三三
一、漢詩の展開と形態……………	三三
二、漢詩の訓讀……………	三八
三、漢詩の評釋……………	三八

第一 唐以前……………	三七
〔一〇六〕 秋風起兮白雲飛(漢武帝)……………	三七
〔一〇七〕 勅勒川陰山之下(無名氏)……………	三九
〔一〇八〕 結廬在人境(陶潛)(東教大・横濱國大・九州大・福井大・山梨大)……………	三一
第二 唐代……………	三三
(一) 五言古詩……………	三三
〔一〇九〕 下馬飲君酒(王維)(福井大)……………	三三
〔一一〇〕 長安一片月(李白)(一橋大)……………	三四
(二) 七言古詩……………	三六
〔一一一〕 翻手作雲覆手雨(杜甫)……………	三六
〔一一二〕 漢皇重色思傾國(白居易)……………	三七
(三) 五言律詩……………	三三
〔一一三〕 國破山河在(杜甫)(京大・滋賀大・和歌山大・長崎大・千葉大・三重大)……………	三五
(四) 七言律詩……………	三八
〔一一四〕 昔聞洞庭水(杜甫)(神戸大)……………	三八
(五) 一封朝奏九重天(韓愈)……………	三七
〔一一五〕 銀燭金闕夕沈沈(白居易)……………	三九
(五) 五言絕句……………	三〇
〔一一六〕 春眠不覺曉(孟浩然)(都立大・和歌山大・静岡大・岡山大)……………	三〇
〔一一七〕 空山不見人(王維)(京大・金澤大)……………	三〇
〔一一八〕 獨坐幽篁裏(王維)(香川大・横濱國大)……………	三〇
〔一一九〕 君自故鄉來(王維)(静岡大・室蘭工大)……………	三〇

成蹊大

〔三〕 千山鳥飛絕(柳宗元)〔岡山大・静岡大〕

〔六〕 七言絶句

〔三三〕 渭城朝雨浥輕塵(王維)〔文科大〕

〔三三〕 千里鶯啼綠映紅(杜牧)

〔三四〕 文人西辭黃鶴樓(李白)〔香川大・静岡大〕

〔三五〕 朝辭白帝彩雲間(李白)〔茨城大・大阪學

藝大〕

〔三六〕 獨在異鄉爲異客(王維)〔廣島大〕

〔三七〕 遠上寒山石徑斜(杜牧)〔静岡大・岩手大〕

〔三八〕 旅館寒燈獨不眠(高適)〔東北大・宮崎大・

武藏大〕

〔三九〕 走馬西來欲到天(岑參)〔都立大・静岡大〕

〔三九〕 勝敗兵家不可期(杜牧)

第三 唐以後

〔三九〕 春宵一刻直千金(蘇軾)〔滋賀大〕

〔三九〕 渡水復渡水(高啓)〔静岡大〕

〔附〕 日本漢詩

〔三三〕 雲耶山耶吳耶越(顧山陽)〔岡山大〕

〔三四〕 休道他鄉多苦辛(廣瀨淡窓)〔*東教大〕

第五部 近代文

〔三五〕 西人特歲創新法製新器者(論幼學)

〔三六〕 思想不必皆頓文學(文學改良芻議)

〔三七〕 居今日而言文學改良(歷史的文學觀念論)

〔早大〕

第四編 實力の訓練

〔三六〕 昔時與可墨竹見精練良紙(一橋大)

〔三九〕 子思居於衛(都立大)

〔四〇〕 太史公曰子貢(東大)

〔四一〕 鄭人游于鄉校(東教大)

〔四二〕 孟子曰老吾老(千葉大)

〔四三〕 日月星辰之運(九州大)

〔四四〕 小人之學也(静岡大)

〔四五〕 草木鳥獸之爲物(都立大)

〔四六〕 月落烏啼霜滿天(京大・熊本大)

〔四七〕 越王勾踐吳を破つて歸る(神戸外大)

〔四八〕 憶得小年長乞巧(都立大)

第五編 漢文學習の主要知識

第一 中國思想史

第二 中國文學史

第三 重要故事成語

第四 重要同訓異字

第五 主要同字異訓

總索引

附表一 中國學藝地圖

附表二 中國文學表覽

〔註〕 目次中の學校名の*印は新制以前を示す

第一編 漢文學習の基礎

第一章 漢文學習の目標

何事にあつてもわれわれはまずその事がわれわれにもたらし意味を考える。漢文を學ぶに當たつても、われわれは第一に漢文が今日のわれわれの生活にどのような意味をもつかを考えてみななければならない。漢文及び漢文學そのもののもつ意味は廣汎複雑であるが、學生諸君の學習の對象としての漢文について言えば、主なるものとして、だいたい次ぎのような點があげられよう。

一、日本文化の源流の把握のため われわれは日本人であると共に東洋民族であつて、われわれの文化は東洋文化の影響を極めて深く受けている。大きく言つてわが國の文化は漢文化から道の精神を、佛教文化から法の精神を攝取して同化的な日本文化を形成したとみられるが、その一つの漢文化すなわち中國文化は數千年の長い歴史をもち、人間生活や社會生活のいろいろな面で鍛えられた、深奥にして複雑な文化である。われわれの祖先たちは、その中のわが國家社會の機構に適するものを導入して、日本文化を培養し、進展させたのである。従つて、漢文を學ぶことは、わが文化の源流を知り、傳統を探索する上に大いに必要なのである。

二、國語生活を正しくするため 漢文化はわが國の國語の發展の上に母體的役割を演じている。文字を持たなかつたわが國は、漢文が傳來すると直ぐ漢字を國用の文字として、表現記述の具に供した。従つてわが國に於いて最も古く確立された文體は漢文直叙體である。漢字から假名が作られ、假名まじりの國文が行われる様になつてからも、公文として漢文が長く使用された。また、各時代に現われたいろいろな文體は、多かれ少なかれ、

漢文の影響を受けていないものはない。また書簡文のごときは、往來物から候文きこうぶんという形式が生まれたが、漢文の影響が極めて顯著である。次ぎに語彙の歴史を辿ってみても、時代が正しくなるほど漢語々彙が加速度的に増大している。すなわち、文體に於いても語彙に於いても、表現の方法に於いても、われわれの國語と切り離したい深い關係がある。漢字制限などによって現代國語生活の合理化を計るにしても、それは漢文・漢語に對する正しい理解の下に行われなければならないのである。

三、日本古典文學の探求のため 漢文が國語生活に與えた影響に劣らないものは、中國文學が日本古典文學に與えた影響である。記紀・万葉集・源氏物語をはじめ、この國の文學にいか深く影響したかは、現に國文學研究によつてつぎつぎに明らかにされつつあるところである。例えば源氏物語の須磨の卷の「三千里の外の心地するに」の一句は、白居易の詩の「十一月中長至夜。三千里外遠行人」という句を理解していなければ、正しくつかむことができないのである。「古今說海」を見ずに上田秋成の「雨月物語」を評することはできないし、また、杜甫を知らなければ芭蕉を語るとは困難であらう。古典だけでなく、森鷗外・夏目漱石・芥川龍之介などの明治・大正の文壇の巨匠たちの文學に漢文學がいかに影響しているかは諸君の親しく指摘できるところである。日本文學史に於いて、もし西洋文學の影響を強調する者があれば、それよりもっと廣い範圍に於いて中國文學の影響のあつたことを、何人も認めないわけにはゆかないであらう。

四、世界文學の教養のため 中國の文學は、いうまでもなく、イギリス文學・フランス文學・ドイツ文學などと共に、世界文學の一環として存するものである。従つて諸君が現代文化人として、イギリス文學を鑑賞し探求することが要請されると同様に、中國文學もまた諸君の鑑賞探求の對象となつて然るべきである。西洋文學には西洋文學としてのよさがあると同じように、東洋文學には東洋文學としての美があるのであつて、中國文學はそれを代表するものである。これを措いてフランス文學やドイツ文學のみを鑑賞しているならば、諸君の世界文學の教養は、著しく視野のせまい、偏したものとなるであらう。日本文學への影響ということとは別に、中國文學がロパーとしてその美を味わうことは、漢文學習の大きな目的の一つであらう。

五、漢民族と中國を認識するため 漢民族はわれわれに最も親近な關係にある民族であり、中國はわが國と極

めて深い利害關係をもつ隣國である。いかなる意味に於いても、われわれはこの隣邦に對して目をふさぎ、無關心でいることはできないのである。とりわけ、將來國民の興望を負うて國際社會に活動すべき諸君にとって、この漢民族と、それが形成する中國とを認識することは、極めて重要な課題というべきであらう。そして、この認識にその民族が残した文獻を読むことが必要なことは自明の理である。

もとより、漢文の精神世界にひたすら陶醉して回顧趣味のとりことなったり、その道德律をもつて、そのまま現代の日本に臨もうとするがごときは、戰時中日古典に對して狂氣じみた尊敬を傾けた態度と何ら選ぶところはないのであつて、こういう態度では東洋古典の正しい價值をも見失つてしまふことになるであらう。諸君はあくまでも學問の對象として、理性と知性に裏づけられた熱意をもつてこれを學び取るべきである。このようにして、漢文を學ぶことは、過去の文化遺産に對する價值の批判力を高め、過去から現在への文化の傳統を意識させ、さらに進んでは良識と教養とを高めて、高度の文化を形成する根底をつくることになるのである。東西文化の融合による新文化の形成ということが、新しい世界の要請であるとするならば、諸君がこれに答えるためには、漢文は重要な課題を投げかけるものというべきであらう。

第二章 漢文の語法

一、漢文法と國文法

まず漢文學習の基礎として重要なことがらを述べよう。漢文學習に於いては、第一に正しく讀む力を養うことが肝要であるが、そのためには漢文の語法及び句法の特質についての理解が必要である。語法・句法は包括して文法といつてもよいであらう。即ち漢文法に關する深い知識をもつことが漢文の實力をつける第一の重要條件なのである。

漢文の特質という、諸君はひっくり返って讀むという點をあげられるであらう。これは、われわれの祖先が漢文をいかに國文に調和させようかと苦心に苦心を加えた末に創案した讀みの方法であつて、國文的な解釋を含んだ讀み方なのである。従つて、このようにして讀まれた文は、すでに國文だともいえる。だから、漢文法といつても、諸君に課せられた漢文訓讀という立場からは、國文法の知識に基づいて習得するのが合理的であり、且つ便利でもある。漢文の學者たちが、諸君に教えるのに特別の文法をつくつて與えたりするが、これは國文法に對する認識不足に原因している。以下ここではすべて現行の國文法に従つて漢文の句法及び語法を考えてゆくことにする。

二、漢文の基礎成分

既に述べたように、訓讀される漢文は、國文と全く同じに見るべきものである。従つて、その成分の關係もまた國文法に於けると同じく、次ぎのように見るのが妥當である。

一、主語述語の關係 漢文の最も基本的なものは、一般に次ぎの様な主語述語關係をつくる。

1	何が——どうするか	主語——述語	主	述	主	述
			月	出。	君子	不 _レ 憂。
2	何が——どんなであるか	主語——述語	主	述	主	述
			水	清。	春日	遅々 _{ナリ} 。
3	何が——なんであるか	主語——述語	主	述	主	述
			孔子	聖人。		

この場合の主語述語の順序位置は國文に於けると同じである。即ち、「何が」に當たる主語は上位に、「どうするか」「どんなであるか」「なんであるか」に當たる述語は下位に來る。

二、修飾の關係

右の主語述語の關係は、更に意味を詳しく言い定めるために、修飾語について述べる。修飾語には連體修飾語と連用修飾語とあるので、次ぎのような關係が成立する。

(A) 連體修飾語によるもの。主語または述語が連體修飾語を伴なうものは、その修飾語の位置は國文の場合と同じである。

(1) 何んな—何が—
連體修 主語 述語
 驕者滅。
 主語 連體修 述語
 何が—どんな—なんであるか
 連體修飾語—主語—述語

(2) 何が—どんな—なんであるか
主語 連體修 述語
 泰山、中國、名山也。
主語 連體修 述語
 主語—連體修飾語—述語

(B) 連用修飾語によるもの。(一) 副詞または副詞に準ずべき連用修飾語を伴なうものは、その修飾語の位置は國文に同じである。

(1) 何が—どんなに—どうするか
主語 連用修 述語
 黑雲、俄、起。
主語 連用修 述語
 主語—連用修飾語—述語

(2) どんなに—何が—どうするか
連用修 主語 述語
 激風、起。
連用修 主語 述語
 連用修飾語—主語—述語

(C) 連用修飾語によるもの。(二) 目的・場所・對象などを表わす連用修飾語(從來の文法で客語・補語といわれたもの)を伴なうものは、その修飾語が述語の下に來る。これ以下は國文と順序が違ってくる。

(1) 何が—何に—どうするか
主語 述語 連用修
 富嶽、聳、雲、表。
主語 述語 連用修
 主語—述語—連用修飾語

良藥、苦、於、口。
主語 述語 連用修

(2) 何が——何を——どうするか

主語 述語 連用修 主語 述語 連用修

逆臣弑^ス君。才子持^ム才。

主語 述語 連用修 主語 述語 連用修

春月照^{ラス}櫻花^ヲ。

(3) 何が——何と——どうするか

主語 述語 連用修

母 稱^ヘ顏^ニ氏^ト。

主語 述語 連用修

水 爲^ム湯^ト。

以上の形式が漢文に於ける文構成の基本的様式であつて、複雑な文はこれらがいろいろに組み合わせられて出来ているのである。例えば「古之聖人惜^ヘ寸陰^ヲ」は、(A)の(1)と(C)の(2)が組み合わせられた形であり、「少^シ焉^デ月出^ツ於東山之上^ニ」は、(B)の(2)と(A)の(1)と(C)の(1)が組み合わせられた形である。

三、成分の省略

成分はつねに右の様に整っているものではなく、往々にしてその一部が省略されることがある。これは國文にも見られる現象であるが、冗漫を嫌う漢文では、特にその傾向が著しい。それゆえ、讀解に際しては、まず省略の有無を調べてみることに肝要である。いま成分の省略される主なる場合を擧げてみると、だいたい次ぎのようになる。

一、主語の省略

主語は國文に於けると同じく、これが當然讀者に理解されると見られる場合には省略されることがある。その主なる場合は次ぎの様である。

(イ) 對話問答の場合

〔例〕 豐公問曰「汝得^タ人^ヲ焉^ト乎^ヲ」。曰「我得^タ二^ニ人^ニ焉^ト」。

(ロ) 事理を説き道德を論ずる場合

〔例〕 夫道若^ク大路^ノ然^リ。(人)豈難^シ知^ル哉^ヤ。

(ハ) 同一の主語を繰り返す場合

〔例〕其言有^レ所^レ激^{スル}則^チ（人）不^セ服^ニ（其言）。（其言有^レ所^レ強^{フル}則^チ（人）不^セ服^ニ（其言）。）

（三）倒裝文における場合

〔例〕往者不^レ追^ヘ來者不^レ拒^マ。（吾不^レ追^ヘ往者吾不^レ拒^マ來者。）

（ホ）命令・戒飭の文における場合

〔例〕彼亦人子也。（汝）可^ニ善^ク遇^ス之^ヲ。

二、述語の省略

主語の省略に次いで述語の省略もまたよく見受けられる。しかしながらその場合も他の品詞がその用を兼ねて述語の位置に立つから、述部全體が省略されるということはない譯である。

（イ）動詞を省いて補助動詞のみで述語をなす場合

〔例〕夫子欲^{シテ}寡^ク其過^ヲ而未^ダ能^ハ（寡^{クスル}コト）。

（ロ）副詞のみで述語をなす場合

〔例〕人一^ニ能^ハ之^ヲ、已^タ百^ニ（能^{クス}）之^ヲ。|| 已^タ百^ニ能^ハ之^ヲ。

（ハ）前置詞を動詞の如く讀む場合

〔例〕事^ヲ之^ニ以^テ禮^ヲ（事^ヲ、葬^ス之^ヲ以^テ禮^ヲ葬^ス）。

（ニ）抑揚形（況・矧・況乎）における下句の述語

〔例〕死馬且^ツ買^フ之^ヲ況^ハ（不^レ買^フ）生者^{（ニ）}乎^{（ヲ）}。

三、連用修飾語の省略

連用修飾語も、文意を不明瞭にしない場合には省略されることがあるが、前の場合程多くはない。その主なるものは次ぎの様である。

（イ）使役形における補語

〔例〕家康廣^メ學^ブ天下^{（ニ）}使^メ（天下^{（ヲ）}）知^ラ所^{（ヲ）}向^{（ヲ）}。

（ロ）否定形における客語

〔例〕人不^レ知^ラ（我^{（ヲ）}）而不^モ慍^ム（人^{（ヲ）}）。

（ハ）倒裝形における代用代名詞

装本
さしえ

池田仙三郎	松野一夫	油野誠一	太田大八	斎藤長三
-------	------	------	------	------